

イスラーム研究では「人間」をどう扱ってきたか

近年、中東イスラーム研究では、特にジェンダーからみたイスラームについての研究が目覚ましく進んでいる。とりわけ、長沢栄治東京大学名誉教授を代表とする「イスラーム・ジェンダー学と現代的課題に関する応用的・実践的研究」(略称:IG科研)では、頻繁に研究集会を開催し、研究成果を出版してきた。明石書店から出版されている「イスラーム・ジェンダー・スタディーズ」シリーズは、女性という問題だけではなく、教育、家族、結婚、そして労働など多様な視点からイスラームを描いている。

このシリーズが読者に投げかけていることがある。それは当たり前のことのようであるが、私たち一人ひとりの生き方は異なっているということだ。「イスラーム」と一言で言っても、内実は多種多様であり、価値観も考え方も異なる。言い換えれば、一人として同じムスリムはいないということだ。また、人々が出会う場面では、価値観や考え方の違いが浮き彫りになる。マジョリティ側から見ていると、ともすれば見落とされてしまう事柄は多くある。社会的に弱い立場にある女性や子ども、そして労働者が自らの生き方を模索している様子を観察することで、イスラーム研究の新たな地平が現れていると言える。

クルアーンから男と女を読み解く

イスラームは、家父長制や部族制など男性が強いイメージで理解されることが多い。それは、預言者ムハンマドや神・アッラーが強い男性像で捉えられてきたことも、大いに関係しているだろう。また、イスラーム思想史においては、「学者」(ウラマー)は男性によって占有されてきた。そのため、イスラーム研究者がイスラームの人間観を探ろうとすると、どうしても視座が男性からの目線に偏ってしまう。

それに対して、イスラームの聖典クルアーンには、クルアーンそれ自体がもつ「世界観」(Weltanschauung)があると指摘した研究者がいる。それは、日本ばかりではなく世界のクルアーン研究を牽引してきた井筒俊彦である。今日、クルアーンは一つの書物になっている。あたかも一人の人物の世界観を探るごとく、クルアーンそれ自体のもつ世界観を明らかにすることを指摘したことは、非常に画期的であった。もちろん、クルアーンは神の啓示であり、預言者ムハンマドを介して伝えられたものであるが、テクストをどのように読み解いていくかという点において、井筒のクルアーン研究はムスリムにも大きな影響を与えている。

クルアーンに対するこうしたアプローチに強い影響を受けたのが、アミーナ・ワドゥードである。彼女自身はムスリマ(ムスリムの女性形)であり、イスラームのジェンダー研究の第一人者である。彼女が著した『クルアーンと女性』(Qur'an and Women)は、これまで男性の視点から解釈されてきたクルアーンを、女性の視点から読み直す試みであった。歴史的に、法学者をはじめとする学者(ウラマー)は男性によって占められており、女性は学問体系を学ぶ機会も学者としての立場に就くことも基本的にはなかった。むしろ、大学などの高等教育の成立のなかで、ようやく学ぶ機会を得ることができたと言える。こ

のことを言い換えるならば、従来のクルアーン解釈はその解釈も男性目線であり、女性目線でのクルアーン解釈はほとんどない状況にある。

クルアーンを見渡すと、神の人間創造において、「男」(r-j-lの語根からなる rijal, rajul

の複数形)と「女」(n-s-wの語根から成る nisā')が創造されたとある。つまり、神が創造した人間は男と女から成る。しかしながら、両者の関係性については平等なのか優劣があるのかをめぐって、クルアーン解釈という点で議論がなされてきた。

男女はどのようにして創造されたか

前回(2024年1月号)でも取り上げた「神は一つの魂(nafs)からあなた方を創り、またその魂から配偶者(zawja-hā)を創り、兩人から、無数の男と女を増やし広められた方であられる」という一節において、ワドゥードは、「一つの魂」(nafs)という語に注目する。この語は、「自我」とも翻訳されたりするが、全人類の共通の起源を指す語としてクルアーンでは登場することを指摘する。また、「魂」というのは男性形でも女性形でもない一言い換えれば男性形でも女性形でも用いられる一特殊な語である。それゆえに、男女双方の本質的要素を構成する。クルアーンのなかで、神はこうした性別のない語を人間の起源としたことを理由に、ワドゥードは男女の平等性を論じている。

さらに、一つの魂から創造された「配偶者」(zawj)という語についても話を進める。ワドゥードは、井筒の方法に依拠しながら、「あらゆるものを両性(zawjayn、つまり配偶者をもつもの)に創造した」(51章49節)とクルアーンの一節を引用する。ここで「両性」と翻訳した“zawj”は、文法的には双数形であるだけではなく、ペアの片方という意味がある。その結果、一つの魂から創造された人間は、生まれた後に自らの配偶者をもつことになるという理解を導くことができる。ここには、男性が上で女性が下という考えは登場しない。ワドゥードは、男性が読んでも女性が読んでも、等しく神の下において平等な人間が存在するだけとしか理解できないと主張する。

クルアーンを通して、現実世界を変えていこうとする女性たちは、男女の関係性というだけではなく、人間という視点から今ある社会を眺めているのである。

[参考文献]

- Amina Wadud, *Qur'an and Woman: Rereading the Sacred Text from a Woman's Perspective*, Oxford: Oxford University Press, 1999.
後藤絵美「クルアーンとジェンダー—男女のありかたと役割を中心に」松山洋平編『クルアーン入門』作品社、2018年、389～413頁。



アミーナ・ワドゥード
女性のイマーム(指導者)として世界的に知られている
<https://arabic.georgetown.edu/meet-the-scholar-amina-wadud/>